広報 はちまんたい hachimantai
Mar.2012 No.146

CONTENTS

●目次
02 Zoom Up 人　藤澤利佳さん
03 特集　全国中学校スキー大会
絆をチカラに夢つかむ
08 Sports　各種ウインタースポーツ大会で市の選手大活躍
09 ３月は自殺対策強化月間
10 NEWS&INFORMATION
アナログ放送は３月31日で終了／国道282号西根バイパス３月16日から一部開通／年度末と年度初めの日曜日に本庁舎の窓口臨時開庁／新しい市農業委員会長に松村勝彦さん選任／小山田邦男さん交通栄誉「緑十字銀章」受賞
12 話題ピックアップ
三ケ田礼一杯市ジュニアスキー選手権大会／松川一の宮太鼓結成25周年記念演奏会　ほか
14 福祉ネットワーク
保健のひろば　環境のみらい
介護のココロ
15 まちの企業探検隊㉖
㈲八幡平精工
われらスポーツ少年団No.21
松尾中学校ソフトテニススポーツ少年団
16 博物館だより　図書館だより
17 よろこび　おくやみ
人口の動き　交通事故件数など
広報クイズ
18 INFORMATION　お知らせ
20 八幡平いにしえの宝
フクジュソウ

今月の表紙

第49回全国中学校スキー大会は２月１日から４日まで北海道などで行われ、小林陵侑君（松尾３年）が大会史上２人目、県勢では初のジャンプ・コンバインド競技の２冠を達成しました。【写真＝１月23～25日に市で開かれた東北中学校スキー大会での小林君。関連記事３～８ページ】

クロスカントリー女子クラシカル　３位
フリー　10位

土屋正恵　つちや・まさえ　安代３年　五日市２区

スペシャルジャンプ　優勝
コンバインド　優勝

小林陵侑　こばやし・りょうゆう　松尾３年　柏台三丁目

特集　全国中学校スキー大会

絆をチカラに夢つかむ

２月１日から４日まで北海道などを舞台に開かれた第49回全国中学校スキー大会。
小林陵侑君（松尾３年）がスペシャルジャンプとコンバインド競技で優勝、
土屋正恵さん（安代３年）がクロスカントリー競技クラシカル３位、フリー 10位入賞を果たした。
さまざまな人たちの支えをチカラに変え、全国の舞台で夢をかなえた２人に話を聞いた―。

（特集７ページまで）

県スキー技術選手権大会優勝
全日本スキー技術選手権大会へ

藤澤 利佳 さん

ふじさわ・りか　32歳　安比高原

◎profile
昭和54年八幡平市（旧松尾村）生まれ。大学まで競技スキーを続け、平成15年から安比スキー＆スノーボードスクールに勤務。ＳＡＪデモンストレーターに認定されている。血液型ＡＢ型のかに座。

自らの滑りに磨きかけ スキーの魅力を伝えたい

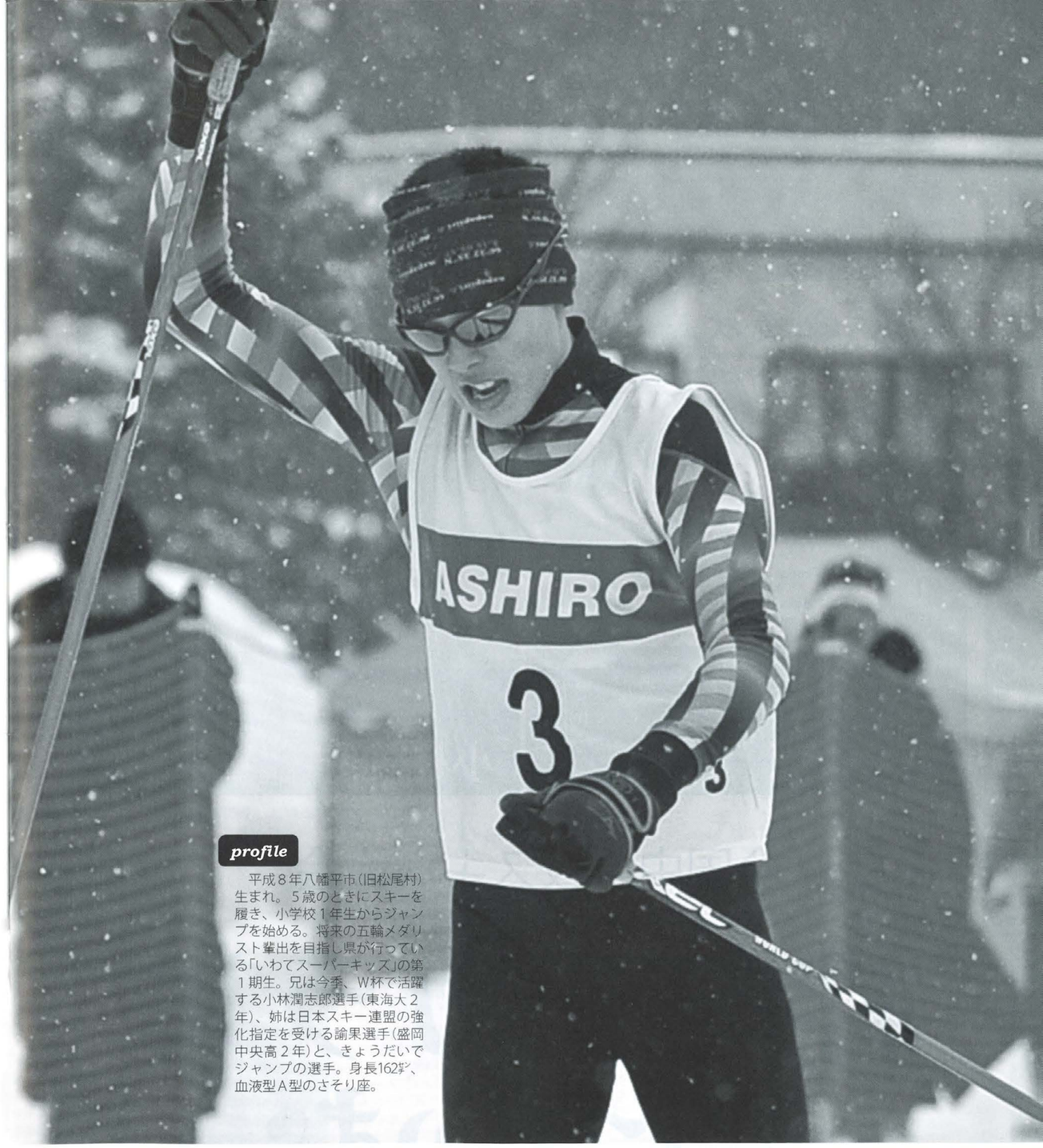
ライバルには負けたくなかった。岩手のチャンピオンとして、全日本選手権に行くことができてほっとしている―。

１月28、29日に雫石町で行われた県スキー技術選手権大会（技術選）、女子個人総合で見事連覇。全日本スキー技術選手権大会（３月６日～、長野県）の切符をつかみ、藤澤さんは安堵の表情を浮かべた。

３歳からスキーを始め、中学校から競技スキーに取り組んだ藤澤さん。大学を卒業し、競技生活に区切りを付け、目標を見失いかけたときに、技術選というものを知った。

タイムだけを競うレースと違い、ゲレンデのあらゆるコンディションに合わせて、いかにスピードを殺さず、きれいなターンを描くかなど、総合的な滑りを競うのが技術選。「ジャッジする人によって見方も違い、奥が深い」と藤澤さんも話すように、レース経験者でも大会で入賞することは難しい。初めて出場した県選手権では、予選通過できず「とても悔しかった」という藤澤さんは、その当時働いていた会社を辞め、スキーに没頭できる環境を求めて安比スキー＆スノーボードスクールに就職。人に教えるために滑りを勉強し、自らの技術を磨いていった。次の年から今回まで９年連続で予選を突破している。また、おととしには同スクールで働く弘之さんと結婚。お互い切磋琢磨し、昨年から２年連続で夫婦での全日本選手権出場を決めた。

技術選の聖地・白馬八方尾根で「納得できる滑りをしたい。決勝の舞台を滑る緊張感を味わってみたいが、まずは準決勝に進むことが目標」の藤澤さんは「スキーは私の人生の一部。年齢を重ねてもずっと続け、一人でも多くの人にスキーの楽しさを伝えたいですね」と夢を語った。



profile

平成８年八幡平市（旧松尾村）生まれ。５歳のときにスキーを履き、小学校１年生からジャンプを始める。将来の五輪メダリスト輩出を目指し県が行っている「いわてスーパーキッズ」の第１期生。兄は今季、W杯で活躍する小林潤志郎選手（東海大２年）、姉は日本スキー連盟の強化指定を受ける諭果選手（盛岡中央高２年）と、きょうだいでジャンプの選手。身長162㌢、血液型A型のさそり座。

Special Jump&Combined

小林陵侑

Kobayashi Ryoyu

先生と二人三脚でつかんだ２冠は史上２人目の快挙

小林陵侑君（松尾3年）が、名寄市で開かれたスペシャルジャンプとコンバインドでともに優勝した。大会史上2人目、県勢では初の2冠達成だ。スキーの聖地・八幡平市から、全国中学王者が誕生した。

これまで、県勢でこの大会の同競技に優勝したのは合わせて4人。いずれも八幡平市出身の選手だ。小林君の優勝は、スペシャルジャンプが第32回大会の畠山拓浩選手（田山）以来、17年ぶり2回目。コンバインドは、第36回大会の永井秀昭選手（田山）、第38回の小林巧選手（安代）、第40回の畠山長太選手（安代）に続き4人目で、9年ぶりの快挙である。

自身も同じコンバインド選手として競技を続ける永井陽一監督（写真左）。3年間、つきっきりで小林君の指導に当たった

今季一番のジャンプで1本目3位からの逆転V

2月2日、名寄ピアシリシャンツェ（HS74㍍、K点65㍍）で行われたスペシャルジャンプ競技。小林君は1本目、「飛び出しのタイミングが合った」とK点越えの71㍍を飛び3位につける。勝負の2本目、小林君のスタートのとき、下から絶好の向かい風が吹き上げた。この風を捉えると、高く飛び出したジャンプはぐんぐん伸び、「今季最高のジャンプ」は最長不倒の74㍍をマークし、逆転で優勝を飾った。

「こっち（名寄市）に来てから練習でも調子良く、そのイメージで本番に臨めた。6位以内に入れば良いなと思っていたので、まさか優勝できるとは―」。今シーズン、W杯ジャンプで健闘を続ける兄・潤志郎選手でも達成できなかった全国中学校大会で、表彰台の中央に立った。

前半リードを守りきり悲願のコンバインド制覇

翌3日のコンバインド競技。前日の勢いそのままに、小林君は前半のジャンプで69㍍の飛躍。飛型も決めてトップに立つ。そして迎えた後半クロスカントリー、2・5㌔を2周するコースに対し、指導する永井陽一先生は「1周目は8割で抑えながら、2周目は全力で行け」と指示した。約1分あった後続との差は、1周目で40秒詰められ、さすがに焦ったそうだが、2週目は必死でリードを守り切りゴール。「狙っていただけにうれしかった」悲願のコンバインドも勝利し、優勝者に与えられる「キング・オブ・スキー」の称号を手にした。

同じ競技の先輩である先生とつかみ取った栄光

前回の大会では、2年生ながらコンバインドで3位。手応えを感じた小林君は「3年生最後の全中は優勝」を誓った。そこから「1年間のほとんどの日は一緒だった」と永井先生も話すとおり、二人三脚で練習に取り組んだ。春先は八幡平の頂上の残雪でフォームチェックや滑り込みを行った。夏場は、サマージャンプやローラースキー、陸上の大会に出場した。自身も同じ競技を続け、国体など優勝経験も持つ永井先生自ら共に走り、飛んで、練習に付き合い手本を示した。また、昨年の11月から12月にかけて、県スキー連盟主催のフィンランドの強化合宿に初めて参加し、いち早く雪上でのトレーニングも行うことができたのも大きかった。

小林君が「2冠達成できたのは3年間、永井先生をはじめ、普段の生活から協力してくれたみんなのおかげ」と感謝すると、永井先生は「努力を続けることを覚え、自分についてきてくれた。時間を大切にして日々のトレーニングを一生懸命やってきた成果だ」と強調した。

夢は「五輪でメダル獲得」兄の背中を追い世界へ

1月12日から17日まで、第1回冬季ユースオリンピックの視察団に選ばれ、オーストリアのインスブルックに派遣された。開会式や競技観戦などをして、国際大会の雰囲気を肌で感じ「このような大きな大会に出場したい」と、小林君の目は世界に向いている。

全国中学校大会後に岐阜県で行われたスキー国体では、高校生相手にスペシャルジャンプで3位に入ったが「しっかり飛び出すための脚力を付けないと飛距離は伸ばせない。距離が10㌔のクロスカントリーも滑れる体を作らないと」と課題を挙げた。

将来の夢は「オリンピックでメダルを取ること」ときっぱり。W杯で海外を転戦し、世界と戦う兄・潤志郎選手の背中を追い、小林君は未来に向かって羽ばたく。

2月20日に松尾中学校で行われた優勝報告会では、全校生徒・教職員らが2冠の快挙を祝福した

profile

平成８年八幡平市（旧安代町）生まれ。小学校３年生のとき、教育実習で来た先生が教えながら滑る姿を見てあこがれ、クロスカントリー競技を始める。安代中学校では、１年生のときから全国大会に出場。今シーズンは、県中学校スキー大会でクラシカル・フリーの２冠に輝くなど、ほとんどの大会で入賞。尊敬する人は田中ゆかり選手。父・母・兄の４人家族。身長150㌢、血液型Ｂ型のいて座。

Cross Country

土屋正恵

Tsuchiya Masae

努力を積み重ね 有言実行の滑りで 岩手の強さ示す

1

50㌢の小さな体に秘められた大きなパワーが中学校最後の全国大会で爆発した。

音威子府チセネシリコースで行われたクロスカントリー競技。土屋正恵さん（安代3年）が3㌔クラシカル3位、3㌔フリー10位に入賞し、土屋さんの尊敬する田中ゆかり選手（北海道・旭川大高1年、沢内中卒）が昨年まで3年連続で達成したW入賞を見事受け継ぎ、岩手県の強さを全国に証明した。

昨年4月、3年生になった土屋さんは、今シーズン「県大会クラシカル・フリーの2冠、東北大会6位以内、全国大会での入賞」を目標に掲げた。

夏場は、陸上トレーニングで徹底的に走り込んだ。厳しい練習も「全ては目標達成のため。スキー部の仲間たちと一緒だったからつらいと思わなかった」と乗り越えた。

シーズンが始まると、夏場に積み重ねた努力が結果に表れる。県大会は優勝候補のプレッシャーをはねのけ、見事2冠達成。東北大会もクラシカル2位、フリー3位で表彰台に上った。また、国体の少年選手選考会では、中学生のレースより長い5㌔にもかかわらず、高校生を抑え優勝した。

迎えた全国大会。2月2日のクラシカルは、競技開始時刻の気温はマイナス13度と厳しいコンディションだった。土屋さんは、直前まで十分にウオーミングアップをしてスタート。「最初の上りで体が動いたからいける」と積極的に飛ばし、コースを駆け抜けた。「滑り終えた時点は2位で、後からスタートした選手に抜かれていくかと思うと、掲示板を見ることができなかった。3位が決まった時はうれしくて涙が出た」と喜びに震えた。翌3日のフリーは「滑らない雪質できつかった」そうだが、ピッチを刻む滑りで力走し、10位に入った土屋さん。有言実行で、シーズン前の目標を達成した。

「クラシカルで表彰台に上れると思わなかった。フリーはもっと上位に入れたかもしれないけど、自分の納得のいく滑りができた」と大会を振り返る。高橋洋之監督も「人の何倍も努力できる才能を持っている。諦めず積み重ねてきたものが花開いた」とたたえた。

「入賞できたのは、仲間やコーチ、親や地域の人など支えてくれた人たちのおかげ。その人たちに恩返しできたと思う」と話す土屋さん。実は、今シーズンのリレーの試合のとき、昨年まで競技をした仲間で、今シーズンは出場しなかった平船黎（たらふねれい）さんから譲り受けたレース用のウエアを着用。「一緒に頑張ってきた黎ちゃんの分も滑ろうと思っていた」。全国大会ではクラシカルのときにも着用し「黎ちゃんの力が欲しかったからかな」と笑顔を見せた。

高校に進学してもスキー競技を続けるという。「フリーのスケーティングなど技術は課題がある。インターハイや国体で入賞して岩手の力になれる選手になるために、もっと練習を頑張らないと。そして、（1年生でインターハイ2冠に輝いた）ゆかりさんに一歩でも近づければ」と新たな目標を語る土屋さん。全国中学校大会後のスキー国体では、高校生の中に入りながら5㌔クラシカルで8位に入る活躍を見せた彼女が、これからの岩手の女子クロスカントリーを引っ張っていくはずだ。

土屋選手に憧れてスキー部に入った２年の小原菜奈未さん（写真左）と山本希歩さん（同右）とともに、東北大会のリレーでは学校初の２位に輝いた

岩手チームの「絆」の力を結集

市内の選手が男女リレー同時入賞の原動力に

クロスカントリー競技では、個人種目のほか、大会最終日の2月4日に都道府県対抗の団体種目・リレーが行われ、市内中学校の4選手が男女同時入賞に貢献した。

女子（4×3㌔）は、第1走小原菜奈未選手（安代2年）が先頭と30秒以内の8位で戻ってくると、第2走土屋正恵選手が5人抜きの快走で3位に浮上。第3走で5位に後退したものの、アンカーの山本希歩選手（安代2年）が落ち着いて前を行く選手をかわし、前回大会より順位を2つ上げて4位でフィニッシュした。

男子（4×5㌔）には、アンカーで佐々木利幸選手（松尾3年、左写真）が出場。2位から5チームが1分以内の接戦の中、第3走から4位で受けた佐々木選手は、順位を落としたものの、前回7位を上回る6位で入賞した。